

## 八郎湖流域管理研究 第3号の発刊にあたって

このたび、皆様に八郎湖流域管理研究第3号をお届けできることに心から感謝を申し上げたい。本機関誌の「刊行の目的」は、第2号の巻頭で詳しく述べたように、①八郎湖流域の正確な認識共有と②共通視点育成に貢献するため、必要な情報の発信と共有の『場』になっていくことにある。その目的に向かって、この『研究の広場』ができるだけ広く自由な気分や精神で参加でき、お互いに新たな知識や活動に接して刺激を受け、切磋琢磨してこの流域をより魅力的なものにしていく『広場』の一つに育っていった欲しい。これが本研究の刊行に関わる全ての人々の願いだと思う。

また、この第3号は、ちょうど八郎湖に係る第2期計画（湖沼水質保全計画）の開始年度に発刊されるものであり、同計画の概要を含む8本の論文と3本の活動成果を収録することができた。とくに次の4点においてこれまでになかった知見を積み上げ得たことを、この際特筆し、喜ぶたい。

第1は、冒頭、「難分解性有機物」と「沈水植物」をめぐって2本ずつの論文が相呼応して論点深化に貢献していることである。「難分解性有機物」については一瀬 諭氏（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）の“琵琶湖”と金 主鉉氏（秋田高専）の“八郎湖”、「沈水植物」については西廣 淳氏（東邦大学）の“関東”と尾崎保夫氏（秋田県立大学）の“八郎湖”の対比が興味深く、有益である。

第2は、工学系分野からのユニークな改善策提案の論文2本である。それは、秋田県立大学システム科学技術学部の須知成光氏の「流動モデル数値解析」、金澤伸浩氏の「耕畜連携循環利用」である。双方とも大いに論議されるべき独自提案を示した。

第3は、八郎湖から60年に漁業で何が起きたかに関する杉山秀樹氏（秋田県立大学）・木村青史氏（秋田水生生物保全協会）の歴史的なまとめと千葉俊成氏（秋田県八郎湖環境対策室）の第2期対策概要のとりまとめである。前者では八郎湖問題の解決には漁業再生が不可欠であることを解明し、後者では「恵みや潤いのある“わがみずうみ”」を含む諸対策を概括的に整理し、今後の足がかりを示した。

第4は、八郎湖流域再生の諸活動の記述が第3号にして初めて登場したことである。それは、藤原貴晃氏（秋田地域振興局）の「水の郷創出プロジェクト」、谷口吉光氏（秋田県立大学）・石川久悦氏（潟舟保存会）の「湖岸植生再生の試み」、石川紀行氏・石井善春氏・藤原直人氏（草木谷を守る会）の「谷津田再生と酒米生産」であり、多様な人々の多様な再生の取り組みと課題が率直に語られたことは今後の活動発展の貴重な足がかりとなる。

お忙しい中ご執筆下さった皆様方、とりわけ外部からご寄稿下さった方々に対して、この場をお借りして改めて深く感謝申し上げます。

秋田県立大学生物資源科学部長

佐藤 了